

地域のビジネススクール在籍者の キャリア意識形成に関する定性的研究

板谷和彦

1. 問題

1.1 背景と目的

我が国でも少子高齢化時代を迎え、人材不足、とりわけ知識労働者の不足が顕在化しつつある。就業している社会人もその多くは、大学卒業、あるいは大学院修了後に高度な専門教育は受けておらず、今日的な高度知識社会に追随する勉学の機会は十分とは言えない。候補となる方策の一つが、社会人学生として大学院で学ぶことであろう。体系化された科目群を履修し、学位取得を目標として研究に打ち込むことにより、就業経験に加えて望ましい知力の獲得を可能にし、高度知識社会における知識労働者不足に対して有力な対策になるものとする。わが国でも、就業者が大学院、専門職大学院で学ぶ機会の拡充の検討が本格化しつつある（文部科学省、2018；内閣府、2015）。

一方で、諸外国に比べて社会人の大学院就学比率は低く（内閣府、2015）、社会人側の関心も高いとはいえない。実際に大学院あるいは、専門職大学院の門戸を叩くまでには、学費や時間の確保だけでなく何らかの心理的な障壁もあるものと思われる。また、都市圏と地域では学ぶ環境だけでなく、学ぼうとする候補者の意識も異なるであろう。日本の風土に合った、社会人が大学院で学ぶことへの支援、機会促進を促す施策やきめ細かな対策を講じていくことが急務になっている。

そこで本論文では、社会人が大学院で学ぶことを志した過程をキャリア意識形成の視点から探索することを目的とする。社会人がそれまでの自分のキャリア

アを通してどのように大学院で学び直すことに至ったのか、エピソード・経験、葛藤や心理的ファクターを明らかにする。これらを探索することを重視し、定性的方法を用いて調査と分析を進める。具体的には、地域のビジネススクール（専門職大学院）在籍者をケース対象とし、キャリアの前段階となる児童・青年期における体験から就業後の経験までの意識変化をインタビューし、その結果を定性的に分析する。実際に大学院入学に至った社会人学生のキャリア意識の根源となる原体験やその影響を発見できれば、内発的な側面から社会人に対する高度な専門教育を促進する手がかりが得られるものと考えられる。

1.2 先行研究レビュー

本稿ではまず扱う対象（事象）のレビューと定義を行う。就業者が学ぶという意味では「リカレント」教育という言葉が広く使われるようになっている。リカレント教育という用語は、1969年5月に、第6回ヨーロッパ文部大臣会議において、スウェーデンの文部大臣であったパルメ氏がスピーチの中で使ったのが最初と言われている（瀧端，1994）。この考え方は、OECD（経済協力開発機構）で注目され、1973年には「リカレント教育－生涯学習のための戦略－」という報告書においてリカレント教育の概念を明らかにした。

一方、我が国で使われ始めたのは最近であり、専業主婦や退職者に対する「職業訓練」的な教育も含むことが多い。社会人大学院生の場合は、「学び直し」という表現も見られる。本稿では「リカレント教育」が有する系譜と広い意味性を理解した上で、関心事の調査対象を「就業しながら学位取得を目ざして大学院で学ぶ社会人学生」とする。具体的には経営学修士（専門職）取得を目ざすビジネススクール（MBA）の院生である。

米国では広義のリカレント教育の概念は古くから確立され、実績も積み重ねられてきた（Knowles, 2015）。一方、我が国において社会人に対する大学院教育への意識は、受講者側からすると「臆病」、企業からは「冷淡」に見られる時代が長く続いてきた（山代，1997）。最近になってようやく国も「リカレント教育」という形で強化を打ち出すようになったが（文部科学省，2018；内閣

府, 2015), その背景には労働者, 特に知識労働者が不足する時代となり, 専門知識をアップデートしながら前例のない企業運営をしないと国際競争に打ち勝てない時代を迎えた認識がある (豊田, 2013)。

日本のリカレント教育, 特に経営実務者向けの専門職大学院の現状や課題に関しては枠組みや制度の視点から報告がある。1990年代から始まった大学院改革の一つとして高度職業人育成が推進され, 研究者養成とは異なる教育体系を有しながら, ロー・スクールやビジネススクール (MBA) の設置が進んだ (山田, 2003; 塚原, 2017)。企業を取り巻く競争環境も厳しくなる中で, 企業内教育だけで職業人高度に要請することが限界になってきたという指摘 (山代, 1997), あるいは, 経営のフロントランナーとして高度な知識を駆使して, 前例の無い企業運営が余儀なくされているという時代的な要請の指摘など (豊田, 2013), 知識の武装の視点から専門職大学院の必要性を議論する動きもみられる。

一方で MBA 取得者に対する企業側のスタンスがあいまいで彼ら/彼女らを効果的に活用できていないという指摘もある (山田, 2003; 山代, 1997)。さらに, 受講者側からも多忙さ, 学費に次いで, 「目ざすキャリアとの整合性が疑問」「自分のキャリアそのものがあいまい」など, キャリア意識とのミスマッチ感が, 社会人が大学院で学ぶことへの障害となっているとの調査もある (文部科学省, 2018)。総じて「時代的にはリカレント教育大いに賛成」という促進の動きがある一方で, 我が国では, 受講者側には心理的に容易には踏み越えられない躊躇や遠慮があるものといえよう。しかしながら, 意識や心理の側面から我が国のリカレント教育, あるいは社会人の大学院での学びを掘り下げた研究はほとんど見られない。そこで, 本研究ではその一歩として, 大学院での教育受講に至った社会人学生の意識を探索的に分析し, 社会人が効果的に大学院で学ぶための手掛かりを探ることとした。考察に際しては, 「学び直し」という視点だけでなく, 俯瞰的に「キャリア」を考慮するようにし, Super (1957, 1970) による自己概念の成熟・発達の側面から職業意識を解釈しようとする理論や, 金井 (2001) のトランジションの概念を参考にした。

2. 研究の方法

2.1 研究の方法

本論文で取るべき視点は探索性であり、このような問いに取り組んでいくにあたってグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser and Strauss, 1967) に代表される、定性的方法によるカテゴリー発見型研究アプローチを採用した (ウヴェェ フリック, 2011)。カテゴリー (抽象) 化を進める際には、Strauss ら (1998) によって提案された理論化の枠組みである図1に示す「パラダイム・モデル」を用いた。抽出したコーディングを「原因」「現象」「帰結」の軸に従って整理し、さらに、「文脈と介在条件」「戦略」との関係性にも留意しながら鍵概念の抽出を進めることとした。

インタビューは筆者の講義を履修した20名を越えるビジネススクールの学生に協力をお願いした。録音されたインタビュー内容はテキストに起こされデータの切片に対するコーディングというプロセスを経た。その後、講義の演習としてカテゴリー化を進めるとともに、相互にデータや解釈を確認し合うなどのトライアングレーションを講じた。

2.2 研究対象の属性

インタビューは、香川大学大学院地域マネジメント研究科に在籍する22名である。男性が17名、女性が5名である。新卒者も3名含まれている。製造業、金融保険業、広義のサービス業などに属する企業や自治体、NPO、医療機関、学校法人などの組織に所属するほか、自営業も含まれる。職種も、管理職 (含経営)、企画事務職、技術専門職、営業職など様々であった。新卒者も全員が何らかのアルバイトに従事している。

2018年後期に実施した「定性的研究法方法論」での演習の一環として、相互にペアを組み、10分間のインタビューを実施した。「小さいころ好きだったことや、こだわりを持っていたことを振りかえってください」と問いかけが基本であり、「本研究科 (香川大学大学院) への入学を決めた心境」との関係性

も一部に含めた半構造化インタビュー形式とした。テープ起こしした後、コーディングを行った。この段階で教員である筆者がトライアングレーションとしてのチェックを行い、フィードバックを行っている。

3. 結 果

3.1 オープン・コーディングの結果

音声データはすべてテキスト起こしし、主要なナラティブを切片化した後、オープン・コーディングを実施した。オープン・コーディング数はデータ全てで250以上が集計された。インタビュー以降、コーディング作業を含めて数回の講義におよぶ演習として実施しているために、講義ごとにコーディング結果をレビューするなど、コーダーの習熟度の差によるバイアスが入らぬよう考慮をはかった。表1にテキスト起こしに対するナラティブの切片化とオープン・コーディングの例を示す。ここで抽出したオープン・コーディングは、表2(d)に示す「性格・志向」の一部に含まれているものである。

表1 テキスト起こしに対する切片化とオープンコーディングの例

オープンコーディング	切片化したナラティブの例
一つに熱中して飽きると次へと変遷	何かつくるのが基本的に好きだったんです。ただ、じゃあ、何でもかんでも好きかと思ったら、そうでもなくて。好きなことが時代とともにだいぶ変わっていったんですね。
瀬戸内を中心に転校や新しい友達も好きだった	だいたい瀬戸内海の所を回って。転校が好きだったんですね。やっぱり新しい地域、新しい友達が好きだったんで。基本的には新しい所に行くのが好きだったんです。だから、転校が苦と思ったことは1回もなくて。
今でも続くキャンプの魅力はルールがなく極めきれないところ	そのぐらいのときに初めて行って、ああ、楽しいなど。なんかこう、ルールがない。だから、同じパターンではないんで、ルールがないから飽きないんですね。
原点にある違う世界を見たい気持ち	飽きから違う世界を見てみたいと。確かに、会社に入って、今考えると、20年間同じようなことをやってきたので、楽だったんは楽だったんですね。けど、よく考えたら、今まで大好きだった新しいものとか、慣れを嫌っていた人生が、何か思い出しちゃって。
会社とプライベートにバランスを取るためのMBAは鍵に	MBAは会社に生かそうと思うのか、それとも、自分のもっとプライベートなものに生かすのかという、半分ずつぐらいですね。会社に役立つ僕の好きなことをやりたいと思います。そういうバランスを得たほうがいいというのも、学びかもしれないですね。

3.2 カテゴリー化の結果

インタビューごとの体験を典型的なイシューに分類した上で、図1に示すパラダイム・モデル（ウヴェー フリック，2011；Strauss & Cobin, 1998）の「原因」「現象」「帰結」の軸に従って整理し、カテゴリー化を進めることとした（以下本稿ではこれらの軸に沿って表に転写した形で結果を示す）。イシューは、次のように分類することとした。すなわち、「親・家庭（4例）」「地域・環境（2例）」「スポーツ・勝負事（5例）」「性格・志向（2例）」「モノづくり・サイエンス（2例）」「音楽・絵画（2例）」「ヒーロー・あこがれ（3例）」「動物・自然（2例）」に分類された。

結果はイシューの分類ごとに、パラダイム・モデルの象限に従って表にまとめた。まず、「親・家庭」の結果を表2(a)に示す。現象は多様であるが、親や家庭の影響が、帰結として前向きに学ぼうとする姿勢につながっている関係が見出された。次いで、「地域・環境」のカテゴリー化結果を表2(b)に示す。地域への意識が学び直しの意識につながっている。

「スポーツ・勝負事」のカテゴリー化結果を表2(c)に示す。様々に没頭する様子がうかがわれ、その後の経験を通して、組織人としてあるべき中で、何ら

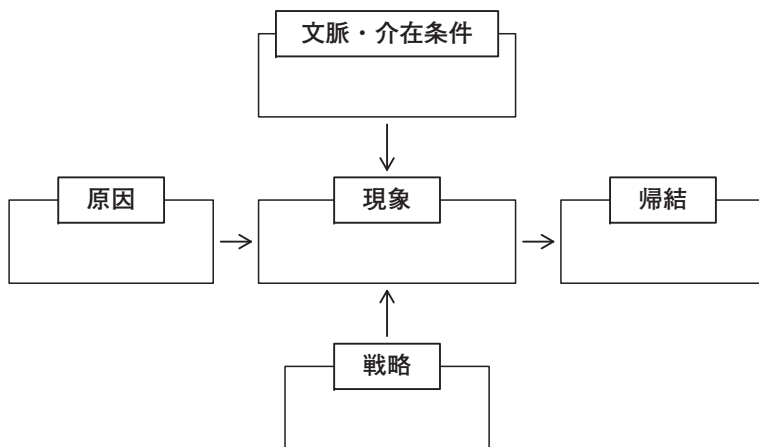


図1 パラダイム・モデルの概念図

かの学びへの気付きを得るに至っている。「性格・志向」のカテゴリー化結果を表2(d)に示す。どちらかというとな inward な原因が最初にあるが、その後も内的なこだわりを持ちながら学ぶ意識を継続している。

「モノづくり・サイエンス」のカテゴリー化結果を表2(e)に示す。原因としては「原点的経験と志向」がある。モノづくりの体験やサイエンスへの興味は、強い原点となっている。強いがゆえに一旦別の志向へと経験は積み重ねられ、

表2 カテゴリー化集計結果 (パラダイム・モデルによる)

表2(a) 「親・家庭」

原因	現象/介入条件/戦略	帰結
父の存在の強い環境 ○○界に勤める父への畏敬と誇り 父を越えたく認められたい気持ち	(現象) ○○界を目指すも制度変更の憂き目に遭遇 銀行員への転身 (介入条件) 読書好きで模型集めにも (戦略) 知識を学ぶことが原点	学んだ知識を生かせる納得感 日々学ぶ今 業務への自信と喜び 父に認められ喜ばず今 地域を知らなかった気付き 学ぶ範囲を広げるわくわく感がある
生まれも育ちも徳島 継続が徹底されていた家庭環境	(現象) 水泳でステップアップと目標達成を経験 初対面や人付き合いはちょっと苦手意識も 中学からはバスケットに 浮き沈みも克服して辞めずに継続 目標を決め進学も新たなライバルと壁 交友関係での悩みもあった日々 思い入れはなく選んだ仕事 (介入条件) ちょっと変わった一人っ子 (戦略) 人付き合いで悩むことから克服のために自分 から意識も 行動基準としての継続は根底に 壁を乗り越えたい自分 苦手でも頑張ろうとする自分 行動基準は意識する自分 人と異なる選択観は今も昔も	行動の中でチャレンジする 自分 意識して前向きに行動する 志向もみなざる今
一人っ子で転校もあったことから 独り志向へ 兄弟へ遊び相手への希求も プラモデルが原点で海外の 建築を見るなど醸成	(現象) 中学からはサッカーに没頭 高校から建築を意識し順風に入學も 希望通りに大手建築会社に 創造性を志向するも現実には向かなかった最初の 就職先 父がきっかけで現在の職場に転職 (介入条件) 現場で味わった数々の苦勞 (戦略) 父への尊敬と反発が混在し母が仲介 スポーツも仕事も個人志向	父には頼りたくないとの思い の延長にある今
家庭の事情で姉としての責任感を醸成 部活に入れなかった悔しさを 勉強に 短大時には事情から勉学に没頭 できず	(現象) 当時は内向的で読書・絵画や考古学に関心 周囲からの評価で内向性から脱却自信も (介入条件) 経営を学びたいと3年間待ったMBA (戦略) 経営者は教師とも人を成長させ喜ばせることが 通じる 強豪校の部活に飛び込み鍛えた根性と体力	高校時代描いた職業の一つに 就いた今 経営者の苦悩と学生時代に 残した悔いをMBAにつづける 今

表 2(b) 「地域・環境」

原 因	現象／介入条件／戦略	帰 結
スポーツは苦手で放課後はアウトドアと走り回り 敵しくはなかった家庭環境	(現象) 高校時代の友人と今も会うも中学仲間は無交渉 地域振興の理解熱から MBA へ 瀬戸芸の現実と理想 (介入条件) 勉強嫌いで数学に苦手意識も ゴールが見えない地域の課題 (戦略) ビジョンと目標が自分の信条 皆で支える協働が鍵に	地域への貢献を有意義にしたい 特に地域高齢者に尽くしたい 想い
個々を伸ばす総合学習方針の 小学校時代 地域学習や体験・食育学習も	(現象) 郷土料理に強い印象 地域に興味を持った自分 (介入条件) 食べること、農作も学ぶ (戦略) 歴史や環境の地域への影響も認識	大学時代も過ごした地域の 居心地が突き動かした MBA

表 2(c) 「スポーツ・勝負事」

原 因	現象／介入条件／戦略	帰 結
スポーツとゲーム・将棋に夢中 となった少年時代	(現象) 負けず嫌いで強い意志發揮 社会人が集まる環境への関心 (介入条件) 大学時の専門には固執せずにむしろ遠のく 自分が勝てる戦略志向に	協同活動への関心 控えめな姿勢への移行 自分の内部に秘めた何かを 解き放とうとする今
サッカーを通して醸成した チームワーク観	(現象) いろんな視点を学んだサッカー パソコンにも興味と実践経験が (介入条件) 小中学校では地域に密着の記憶 (戦略) 取り巻く業界まで関心が パソコンのスキルは仕事での武器に	パソコンを通して先端・創造 性と触れ合う サッカーからは協調性・調整 力を学ぶ 現状の知識に飽き足らずに MBA に
多様なモノ・コトへの強い 好奇心と着手 スポーツはバレーに集中	(現象) 勝負へのこだわりと背後のゲーム性に関心 鍵となるオンオフの切り替え (介入条件) 好奇心を引き出した恩師と影響 切り替えは仕事も家庭も (戦略) 戦略志向も自覚 自分の時間への強いこだわりも 中学時代と今もスタイルにはアナロジーが	MBAは自分にとっての切り替え スイッチ役 自分の時間への家族の理解と 満足感 時間区分のバランスにも気付き がある今
野球が人生の原点 野球が当然の義務の小学時代、 思いとつみ重ねる訓練	(現象) 構築した多数・多様なネットワーク 香川で育む交友と地域 (介入条件) 図画工作で有する入賞体験 (戦略) 団体行動の掟とらえた当時 独自の思考を有する認識 独自志向で組織を良くする視点を醸成	危機感から学ぶ重要性を認識 組織の団結力を引き出したい と思う今
継続するサッカー 得意でもあり居場所でもある サッカー	(現象) 転勤がない公務員へ 苦言を呈することもあるサッカー仲間との付き 合い (介入条件) 奥深く心地よいサッカーの真髄 (戦略) 積極性を仕事でも活かす自分 専門を深めるより幅を広げる志向	絶好の部署とポジション 学び直しに立候補、向上心は 半端なしと認識

表 2(d) 「性格・志向」

原因	現象／介入条件／戦略	帰結
独りを感じながらも満喫した 小学時代 小学時代の絵日記指導が文書 への原点	(現象) 小学校高学年からは読書へ移行 親の影響の推理小説からのめり込んだ SF へ移行 (介入条件) 道具やプラモデルも好きだった当時 (戦略) その後の文書表現に読書は好影響も 読書は知識習得の一生に続くエンジン	現在の仕事に活かされ性にも 合っていると デジタルも得意で読書・文書 力と統合する今
一つではなかった好きなもの の初物や流行に魅かれた	(現象) 一つに集中して飽きると次へと変遷 瀬戸内を中心に転校や新しい友達も好きだった 社会人から始めたキャンプ 20年間も続けた自分に誇りもスキルも向上 (介入条件) 現職はむしろ苦手な機械分野 (戦略) 今でも続くキャンプの魅力はルールがなく極め きれないところ 原点にある違う世界を見たい気持ち	呼び起されて楽しむ今 会社とプライベートにバランス を取るための MBA は錠 (かすがい) に

表 2(e) 「モノづくり・サイエンス」

原因	現象／介入条件／戦略	帰結
モノづくりへの関心が原点 親の志向家庭環境もモノ づくりへ 作品への受賞や親からの賞賛	(現象) 自分も意外と思う野球の継続 やりがい自分の納得感に依存 (介入条件) 野球の継続を支えたのは諦めることへの罪悪感 (戦略) 論理性を内在させた好奇心が自分の認識 大きな仕事への野心 危機感と負けない戦略志向がベースに 結果が見えることへの達成感が自分のエンジン	早期の選択はミスマッチも 引き起こす 現状からの打破を思いに MBA へ 派遣がきっかけ時間制約も やる気満々 変革の困難さの認識と挑戦志向 の混在
サイエンス広範への強い興味 宇宙へは特段の関心 きっかけや影響はエンジニア の父から	(現象) 変遷する具体的な対象アイテム 進化・身近になったサイエンスへの再開も 寝る間も惜しんで没頭独自理論まで極めようと する (介入条件) 進むにつれて壁となった数学 (戦略) サイエンスは共通の真理 今でも保持するサイエンスへの興味と関心	サイエンス関わった自分や 人への関心 それを解き明かそうとする今

表 2(f) 「音楽・絵画」

原因	現象／介入条件／戦略	帰結
絵が好きだった子供時代 好きな画家への強い関心	(現象) 内的にイメージを描く自分へと転化 イメージは理想を追うも試行錯誤 描いた絵に評価を得て気づく自分 家族を通しての幸福感 非経験者とのずれや違和感も (介入条件) スポーツや武道から得た教訓 (戦略) リアルさの追求と達成感志向 観察力から感謝される自分の長所を認識と自信 得た同調力や協調性の必要性 兄弟の真ん中というポジションが作る自分	多様な患者と接する今の職業 察することへのゆるぎない 自信と仕事に活かす今
いろんな科目が好きだった 小学生時代 計算や図形も得意だった算数 算数よりも得意で好きだった 音楽や美術 音楽の原点はハーモニカ	(現象) 鼓笛隊も経験した小学生時代 絵画クラブから高校では油絵も バレエから絵画に戻る経験も (介入条件) 次第に苦手となった数学 (戦略) バレエに関する母親の理解と父親の反対 クラブ活動も熱心で長めに通った幼稚園 音楽や美術を後押しした幼稚園	続かなかったが今も嗜む鍵盤 楽器

表 2(g) 「ヒーロー・あこがれ」

原因	現象／介入条件／戦略	帰結
ヒーローへの憧れ・夢から現実へと移行した少年期	(現象) 一貫校に入学 商品開発の面白さに魅かれる 今一つ乗れなかった就活 卒論で見出した人や地域のために働く選択肢 (介入条件) 進路に際しての恩師の存在 恩師の示唆と自分の価値観を合わせて進路決定 周囲は保守的・安定志向 (戦略) 未知や人がやってないことへの意欲と志向 社会人や多様な人たちと学べる MBA に	活動の範囲を広げたいと思う 今
ドラゴンボールにあこがれ兄の影響から幼年から空手に打ち込む プラモデルにも興味と関心	(現象) 組み上げ遊びから工学を志向 車両に関心があり△△社に入社 車掌業務の経験から接客志向に移行も モノづくりを通して娘と喜びの共有も (介入条件) 兄を尊敬し空手も継続 (戦略) 弟に誘示する組み上げ遊びのスキル	さらに経営学への関心も芽生える MBA で感じる同級生とのギャップ感を前向きにとらえる 今
裕福ではなく読書・漫画へ漫画を通して歴史に接する 闘争の将上杉謙信への憧れその正義感に打たれる	(現象) 謙信のエピソードに感銘も 救急体制などに無駄の多い医療現場の認識 (介入条件) 生き物への関心も芽生えた少年時代 生き物への残酷さと自分の解釈 現場の提案が通らない現場 (戦略) 病院の役割分担の明確化を持論に	医療から政策へと興味も移行し MBA へ 国策も動き出すタイミングの 今

表 2(h) 「動物・自然」

原因	現象／介入条件／戦略	帰結
動物と触れ合い影響も受けた子供時代 アニメ影響でテニス部への入部を試みる	(現象) 入部が多すぎて結果としての帰宅部 音楽にはまった日々 調理師から栄養士へと変更して最初の就職先へ 理想と現実のギャップを味わった最初の職場 (介入条件) 厳しかった就職事情と幸運さ 香川にどまる事情 人が減る中で 10 年間担った事務仕事 少なかった店舗を拡大してきた職場の経営者 (戦略) 一つのことへ集中する志向は仕事にも 資格の重要性を認識	ブランク後の現場 苦勞して積んできた経験の 日々
幼少期の遊び場所への原点観 夢として描いた自然や緑 高度成長期の自然喪失感に振り返りの原点 今の自分を作ってくれた親の存在 男兄弟に囲まれた家庭 故郷よりは親への愛情	(現象) 習い事で知る自分 (介入条件) 転勤も経験し故郷意識は乏しく (戦略) 創造性への希求 やりたいことを選択してきた強い想い 周囲や環境との適合は楽観的に	今できる公園・自然を守ること 経済を学びに MBA へ

もう一度振り返る現在がある。「音楽・絵画」のカテゴリー結果を表2(f)に示す。鑑賞や自ら好きだった芸術が原点となり、自分の中にアンカーを築きながら現在の職業に導かれている様子がうかがえる。

「ヒーロー・あこがれ」のカテゴリー結果を表2(g)に示す。漫画の登場人物に没頭する原点があり、一旦現象としてはそこから離れることとなる。結果として現在も変化を遂げる自分がいて、学び直しの機会へと導かれている。そして、「動物・自然」のカテゴリー結果を表2(h)に示す。動物や自然と接していた原点がアンカーとなり、様々な経験を経るもアンカーへ引き戻されながら再び学ぶ機会に巡り合っている。

4. 考 察

イシューごとにまとめた分析結果をさらに抽象化を進めるように横断する形で俯瞰的な考察をはかった。その結果、これらを含む概念としてまず、「内なる原点を胸に今の仕事に取り組む自分」「強く受けた影響からの解放をきっかけに認識した成長過程にある自分」という2つを導いた。さらにもう一段抽象化をはかると「多様な原点が引き起こす様々な現象を経た今、仕事に見出すポジティブであろうとする自分の姿」という鍵概念に到達した。

導いた鍵概念を解釈する理論としては、Super (1957) による自己概念に基づく成熟・発達の過程がある。個人が「自分自身について描く自画像」を起点に成熟と発達を説明付けするものである。児童・青年期の影響を受けるものは様々であり、そこからの成熟・発達のプロセスも様々であるが、「成長」という言葉で括ることができる。親や家族からの期待、組織の期待、自分自身の志向も含めて、確かに何らかの「自分自身に描く自画像」を秘め続けている姿がうかがえる。

一方、金井は、キャリアを長い時間軸から見た仕事生活のパターンや意味付けとして捉える中での「節目」の重要性を指摘している。遭遇したならばしっかりと考えるべき節目を「ポジティブであろうとする自分の姿」を成長させるための再び学ぶ機会へのトリガーとして多くのインタビューイが捉えているも

のと考えられる。ナラティブ(その分析結果としてのオープン・コーディング)を通して昇進志向や大学院で学ぶことへのエリート意識は感じられない。あくまでも自分の内なる原点を軸として、大学院での学び直しを前向きに自分を変革する何らかの機会に捉えようとしている様うかがえる。

これらの考察を考慮すると、プロフェッショナルとしての職業専門性も高く、昇進やより良いジョブポジションの獲得を目的とした米国におけるリカレント教育志向と異なり、我が国では、より内的な側面にはたらきかけをしながら、人生を通した成長の系譜で社会人が大学院等で学ぶ機会の促進策をとらえていく必要があるものと考ええる。

本研究は、短期間ではあるものの、比較的多数のインタビューから結果を得たものである。「多様な原点が引き起こす様々な現象を経た今、仕事に見出すポジティブであろうとする自分の姿」という鍵概念の含意は、学び直し、すなわち本稿の目的とする、社会人を大学院へと導く支援の方策への拠り所になる可能性があるものと考ええる。

5. 本研究の限界

本研究では22人からインタビューを得ることができたが、各インタビューは10分間と短時間であった。本稿で得られた考察を深め、さらに一般化をはかるためには、より長い時間を設定したインタビューを実施することが望ましい。また方法論に関しても、グラウンデッド・セオリー・アプローチの一部を用いたにとどまっておられ理論の飽和までは至っていない。今後の課題としたい。

謝 辞

本研究におけるインタビューとして協力を得た香川大学大学院地域マネジメント研究科の2018年度「定性的研究方法論」の受講学生に感謝する。

参 考 文 献

- Glaser, B. G. & Strauss, A. L. 1967 The discovery of grounded theory : Strategies for qualitative research, Chicago Aldine publishing co..
- Knowles, M. S., et al., 2015 The Adult Learner : The Definitive Classic in Adult Education and Human Resource Development, Routledge.
- Strauss, A. L. and Cobin, J. 1998 Basics of qualitative research, London : Sage.
- Super, D. E. 1957 The psychology of careers : an introduction to vocational development, Harper & Row.
- Super, D. E., & Bohr, Jr., M. J. 1970 Occupation psychology, Wadworth.
- 金井壽宏 2001 「キャリア・トランジション論の展開：節目のキャリア・デザインの理論的・実践的基礎」国民経済雑誌 Vol.184, No. 6, pp.43-66.
- 文部科学省 2018 「リカレント教育の拡充に向けて」平成30年7月28日文部科学省専門教育課公開資料.
- 内閣府 2015 『社会人の学び直し（リカレント教育とキャリア・アップ）』平成30年度年次経済財政報告 第2章.
- 瀧端真理子 1994 「スウェーデンにおけるリカレント教育提唱の背景と目的」京都大学教育・社会・文化研究紀要 Vol.1, pp.67-81.
- 塚原修一他 2017 「社会人の学び直しからみた大学教育」日本労働研究雑誌 No.687, pp.27-36.
- 豊田香 2013 「専門職大学院ビジネススクールにおける知識の性質についての考察：学術知と実践知の関係性の視点から」東京大学大学院教育学研究科紀要 Vol.52, pp.275-285.
- ウヴェ フリック, 小田博志他(訳) 2011 (新版)質的研究入門－人間の科学のための方法論－, 春秋社.
- 山代研一 1997 「経営実務者教育におけるリカレント教育の現代的課題」山口経済学雑誌 Vol.45, No.4, pp.575-589.
- 山田礼子 2003 「大学院改革の動向－専門職大学院の整備と拡充－」教育学研究 Vol.70, No.2, pp.148-164.